

2025年 2月 9日 大井バプテスト教会第一礼拝メッセージ  
宣教題 「闇の中に届く光」  
聖書箇所：ヨハネによる福音書 1章1～5節

田森茂基

新共同 ヨハ 1:1-5

【初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。(新共同訳)】

おはようございます。昨年に続いて、今年もこのように大井バプテスト教会の第一礼拝において、講壇奉仕をさせていただけることを主の導きと信じ、心から感謝いたします。私は、幼い頃からこの教会で育ち、2003年4月から牧師として歩む為、この地を離れました。それから20年以上が経ちましたが、現在も、北海道旭川市にて牧師として歩ませていただいています。

北海道に住むようになってからもうすぐ丸15年が経過します。冬の旭川市を訪ねた事がある方や、実際に暮らした事がある方だけでなく、そのような経験がなくても、冬の旭川と聞くと、辺り一面が雪に覆われる豪雪地帯といったイメージをお持ちの方が少なからずおられるかと思えます。旭川での暮らしを始めた当時、私自身も、そのような現実の中で、驚きや戸惑いと併せて、僅かながらの喜びを覚えつつ過ごしていました。ですが、ここ数年、特に昨年より顕著に感じています。雪が少なくなっていると感じています。今年に関しては、降る量も少ない上に、気温の関係で降った雪が解けてしまうのが早いのです。この15年の中で、1月に道路の雪が解けて、センターラインや停止線が見えたのは初めての事で、除雪作業が少なく済む事にほっとしつつ、改めて「地球温暖化」の深刻さを思い知らされています。

とは言え、今日は、そのような北海道の現実から、深刻な話しをするために、ここに立っている訳ではありません。そうではなく、北海道でクリスマスを迎える度、私が感じてきた喜びを紹介させていただきたいと願い、準備をして参りました。先ほど司会の方に、『ヨハネによる福音書』1章1節以下を読んでもいただきました。その中の4節に、【命は人間を照らす光であった】とあります。この前後を読む中で、ここで【命】や【光】、或いは【言】と表現されているのは、世界中でクリスマスの時期に誕生を記念している【イエス・キリスト】のことであると分かります。ですから、私が牧師をしている「旭川バプテスト教会」が、毎年12月24日の夜に開催している「クリスマスイヴ燭火礼拝」では、必ずこの『ヨハネによる福音書』1章から「世の光」と題した短いメッセージをしているのですが、その度に、必ず集会に出席された皆さんに投げかけている質問があります。それは、「皆さんは、光にどんなイメージを持っていますか」という質問です。今日はこの問いを、クリスマスではありませんが、皆さんにも投げかけさせていただきます。皆さんは、“光”にどんなイメージを持っておられるでしょうか。今日の聖書の箇所から、どんな“光”の働きを想像されたでしょうか。

おそらく、多くの人が思い描く“光”のイメージは、明るいということであり、その働きとして、周りを照らす明かりをイメージするのではないのでしょうか。「見えないものや、隠されたものを、明らかにする働き」と言い換えた方がピンと来るかも知れません。簡単に言ってしまうと、「照明」ということです。そして、この“光”の理解に基づき、改めて、聖書に記されている【イエス・キリスト】の言葉や行動に注目すると、それらによって【イエス・キリスト】に出会った人々が、様々な気付きを与えられる場面や、本人さえも気が付いていなかった弱さや愚かさや、不完全さが明らかにされていることに気が付かされます。私はこの事柄を、“光と影”の関係で理解しています。

私たちが生きている世界では、ある物体が光を受けると、光に対して反対の方向に影が生じます。この影が、【イエス・キリスト】と出会った人々の気付きや、自覚、無自覚を問わず、その人が抱えていた神に対する“罪”であると私は受け取るのです。そして、【イエス・キリスト】と向き合う者は、【イエス・キリスト】の十字架と復活によって約束された赦しによって、自らの“罪”から解放されます。しかし、【イエス・キリスト】に背を向ける者の視界には、いつも影が映り続けるのです。

このような“光”の理解に加え、私は旭川で暮らす中で、それとは異なる“光”についての気付きを与えられました。それは、「熱」です。学生時代に、理科の授業の中で、「光は熱を持つ」ということを学んだはずなのですが、私はその事を、旭川に来て冬を迎えた時に、ようやく実感したのです。冒頭でも紹介しましたように、旭川の冬は、辺り一面が雪に覆われますが、その雪は必ず溶けてなくなります。その際の、どのように解けるか分かるのでしょうか。ご存じの方や、話しの流れから察した方もおられるかと思いますが、雪は気温の上昇によって一律に溶けるわけではありません。光が射すところから溶けて行くのです。建物の4方が雪に覆われているとすれば、建物の陰となる北側の雪が最後まで残ります。これは、光が熱を持っており、光が差し込んだところの雪を、熱で溶かしているからに他なりません。この事は、ろうそくの“炎”を“光”と捉える事で、容易に納得できるかと思います。

私は、この理解を【イエス・キリスト】に重ねる時、更なる気付きが与えられました。それは、神から「世の光」として遣わされた【イエス・キリスト】は、私たち一人ひとりの心の内に宿り、悲しみや、失望や、孤独によって冷えた心を暖めてくださるという事です。別の表現をするならば、【イエス・キリスト】は、絶望に打ちひしがれた者に伴われ、ない、今日を生きる力と、明日に向かって歩み出す活力の源となる希望を与えてくださるという事です。

私たちは今、暮らす地域の違いを超えて、将来への不安や、生活の厳しさを共有しているように私は感じています。それ故に、私は聖書が【イエス・キリスト】を“光”と表現し、その“光”は神によって私たちの元へと遣わされたと記している事を、喜びの知らせ「福音」と受け取るのです。そして、この喜びの報せを、多くの人と分かち合いたいと願っています。そのような機会を、今日もこうして与えられた事を、神の導きと信じ、心から感謝します。